論文の内容の要旨

論文題目　Uyghur Education and Social Order:
The Role of Islamic Leadership in the Turpan Basin
ウイグルにおける教育と社会秩序―イスラム指導階層の役割の研究―

氏　　名　王　　建　　新

中国には、回、ウイグル、カザフ、キルギス、ウズベク、タタール、サラール、ドンシャン、ボアンとタジクの 10 のムスリム少数民族があり、約 2000 万の総人口を持っている。そのなかで、新疆ウイグル自治区に居住し約 800 万を占めるウイグル族の人口は、回族と並び最大のムスリム集団である。ウイグルの人々にとって、イスラムは、信仰と儀礼活動を支える宗教的原理の体系であると同時に、民族の伝統と集団的アイデンティティを構築する文化体系であり、民俗知識を伝達する教育体系でもある。

南新疆におけるウイグル族の伝統的居住地域の一つ、トルファン盆地においては、15 世紀にイスラムへの改宗が行われた。当初、神秘主義イスラムが宗教生活をリードしていたが、20 世紀に入ってから、イスラムが持つ文化体系としての役割は、政治と社会環境の変動に応じてさまざまな形ではげしく変貌した。1950 年以前のトルファン盆地では、イスラムの宗教知識は、宗教生活の中軸であっただけではなく、識字能力を身につけるための基本教育の媒体でもあり、社会的権威をもった宗教知識人たちは、ウイグル人の社会生活の全般において重要な役割を果たしていた。50 年代に入ると、社会主義革命と一般教育の普及の影響でイスラムが持つ教育の機能が低下し、宗教知識階層は古い封建体制の代弁者として批判され社会的権威を失った。1980 年以降、イスラム文化の復興が図られるようになり、トルファン盆地のウイグル族の人々は、伝統文化の再建に取りくんでいる。

現在のトルファン盆地のウイグル社会において、イスラムは再び伝統文化の中軸として機能するようになり、イスラムの宗教教育も地方の伝統教育の体系としてその合法的な地位が認められている。宗教指導者たちは、宗教学校での専門教育、村落モスクでの初級教育、宗教知識人の

家庭での個人教育、儀礼活動の宗教祭司などのさまざまなレベルでイスラム教育を展開している。彼らは、イスラム的な伝統教育に参与するものと社会的に位置付けられ、宗教知識を伝達することを通じて、ウイグル族の民衆に対して多大な影響を持ち、地域社会の組織者として、確実に社会的文化的ないし政治的に大きな役割を果たすようになっている。彼らの仕事の本質は、社会主義の社会環境のなかで、イスラム文化のウイグル化またはウイグル文化のイスラム化を図ることにある。

本論では、筆者は、新疆ウイグル自治区のトルファン盆地で行った合計 20 ヶ月間の現地調査で得られたデータ・資料に基づいて、ウイグルのイスラム宗教知識人が果たす役割及びその変化を分析することを通じて、20 世紀後半のウイグル社会における宗教文化の変容、文化・教育体系としてのイスラムのあり方、そして地域的な慣習との関わり方を明らかにすることを試みた。

この論文は、序論と結論を除き 10 章から構成されているが、各章はそれぞれトルファン盆地における民間のイスラム教育の一側面を取り扱っている。第 2 章と第 3 章は、1950 年以前の民国期とその後の社会主義革命におけるイスラム教育及び宗教知識人の役割を問題にし、それらの変化の実態を明らかにした。第 4 章は、現在のウイグル族の村落社会における社会権威の基本構造、そしてそのなかにおけるイスラム宗教知識階層の位置づけと機能のあり方について分析を行った。第 5 章では、ウイグルの宗教知識階層によるイスラム教育の構築、政府の政策と行政管理の仕組みなどについて述べながら、それらの相互関係に関する分析を行った。第 6 章は、トルファン盆地におけるイスラム信仰の基本形態について、一般庶民の宗教認識におけるコーラン、モスク及び宗教指導者などの意義を中心的に取り上げ、それらとウイグルの人々が持つムスリム・アイデンティティとの関わりを考察した。第 7 章では、コーランの朗誦に象徴される宗教的神秘力と宗教知識人の社会的影響力との関わりを中心に、儀礼活動の実態と宗教知識人の教育的役割を論じた。第 8 章では、宗教知識人の行う病気治療の儀礼について取り上げ、彼らの治療儀礼についての語りが、ウイグル族の土着的病気観と治療方法にイスラム的正当性を付与していることを報告している。第 9 章では、トルファンのウイグル宗教知識人が編集した、モスクでの説教に用いられるテキストの分析を行っている。その結果、イスラム指導者は、モスクの説教においてイスラムの原理原則に照らしてさまざまな社会問題を扱っていることが明らかになった。第 10 章と第 11 章では、ムスリムの聖なる旅を議論の対象にしている。トルファン盆地のウイグル族の人々は、メッカ巡礼やムスリム聖者廟への旅をさまざまな意味で宗教的救済の象徴としてとらえているが、宗教知識人たちの教説を見るかぎり、聖地への旅は、やはり地方的宗教慣習のイスラム化及びイスラムの土着化の過程であると結論づけることができる。